



日本銅センター賞
2026
JCDA
AWARD

銅が紡いだ品質と誇り

LIXIL 尾道工場にみる

「自慢できる工場」のかたち

洗面所や浴室は私たちの生活に欠かせない場所だが、水栓金具が銅合金でできていることは一般にはあまり意識されていない。毎日のように触れているこの水栓金具は、いったいどのようなに作られているのだろうか。その製造工程を見せてもらおうべく、第53回日本銅センター賞を受賞したLIXIL 尾道工場を訪ねた。



Reportage

2 尾道に工場がある理由

尾道市は広島県東南部に位置する港町で、古くから商都として栄えてきた。瀬戸内の美しい景観に加え、海と山が近接する独特の地形も魅力のひとつだ。新尾道駅にほど近い高台に建つ尾道工場は、今年で創立41年を迎えた。その歴史は、LIXILの源流の1社である伊奈製陶株式会社の時代にまでさかのぼる。工場長の横山晶さんに、尾道に工場が建てられた経緯を伺った。

「近くで良い土が採れるということで、最初は土地だけを購入したと聞いています。10年ほどは空き地のままでしたが、水栓金具の需要が伸び、既存の彦根工場・半田工場だけでは供給が追いつかなくなったことから、1985年によりやくこの土地に専用工場が建設されました」

伊奈製陶の社名がINAXに変わったのも、ちょうど工場設立の頃だ。以来、水栓金具の基幹工場として、LIXIL 尾道工場は水栓関連の製品を幅広く手がけてきた。



▲猫の町・尾道にちなんだマスコットキャラクター



▲(上2枚) 浄水器内蔵型シングルレバー混合水栓とめっき前のパイプ部分
(下) サントリーと共同開発したキッチン用ミネラル浄水栓

2 銅がつなぐ、ものづくりへの信頼

今回の取材でまず驚かされたのは、考え抜かれた工場見学のリート設計だ。会議室での概略説明に始まり、現場でも社員の方々が入れ代わり立ち代わり、各々が担当する工程をわかりやすく解説してくれた。尾道工場は、最終の組み立てラインまで一貫生産体制を備えていることも大きな特色だ。加熱された銅合金の棒材が、鍛造・研磨・めっきという工程を経て精密な水栓金具へと姿を変え、完成品として梱包されるまでの過程を間近で見ることができたのは、貴重な体験だった。

金属を溶かして型に流し込む「鍛造」に対し、金属を叩いて成形する「鍛造」は金属組織がより密で均一になるといふ。実物を見ながら解説を聞くと、水漏れを許さない部品の製造に「鍛造」が選ばれている理由がよく理解できた。

印象的だったのは、多くの工程が自動化される一方で、人の手による繊細な作業も随所に残っていたことだ。作業工程について、横

山さんはこう語る。

「形状が複雑な製品には人の手が必要で、水栓が正しくできているかどうかの最終確認も、人が行います。今後も技術開発を進めていきますが、人の役割はゼロにはならないと思います」

尾道工場では金属加工の工程を「膨らませる」「繋げる」「鍛える」に分けて、それらを3つの魔法」と名付けている。デザイン性を生むパイプ加工から信頼性を支える鍛造・切削まで、これらの魔法を操るのは工場の随所にいる匠たちだ。

品質を守る仕組みも徹底されており、従業員が気づいたことを専門メンバーがすぐに現場で確認する体制がある。安全面への配慮も万全で、今年は厚生労働省の奨励賞を受賞したという。

「通常時は工場の中にリフトが入らないんです。人との接点をつくらないようにしています」

こうした細かなルールを徹底することで、事故を未然に防いでいるのだ。

2 地球1周分のフレキホース

尾道工場の象徴ともいえる水栓部材は、「フレキホース」だ。

「これまで生産したフレキホースをつなげていくと約4万キロメートル、地球1周分ほどになります。ちょうど去年、その生産量を達成することができました」

ひとつひとつの製品を丁寧につくりあげる工程の積み重ねが、この途方もない数字につながったのだ。フレキホースにも欠かせない銅の魅力が、あらためて横山さんに伺った。

「リサイクル性がよいことはもちろん、耐食性に優れ、加工性が非常によいことも挙げられます。鍛造、バルジ加工、機械加工など、いずれの加工にも適していますし、めっきとの相性もよいですね」

水栓金具と銅は、切っても切れない関係にある。

2 家族に自慢できる工場

尾道工場では、環境への取り組みも積極

的に行われている。オールインワン浄水栓やタッチレス水栓といったエコ商品に加え、工場の屋根には太陽光パネルが840枚設置されている。削り出しで生じる端材は原料メーカーへ戻され、再び銅合金として生まれ変わっていく。

工場見学の出発前、建物の前でマスコットキャラクター「フレニャン」「スイニャン」のパネルと一緒に記念撮影をさせてもらったが、このキャラクター誕生の裏話も伺うことができた。

「工場見学で写真を撮るとき、何もないと華がないねと、女性社員が話してくれたことがきっかけでした」

猫の町として知られる尾道にちなんで2つの名前をつけたのは、水栓事業部水栓製造部長の福本達郎さんだ。イラストは、発案者でもある女性社員が制作した。今ではこのキャラクターが刻印された記念品が、来場者へのお土産として手渡されている。

今回の取材から見えてきたのは、誇りを大切にしている工場の姿だった。毎年11月には「工場参観日」が開催され、社員が屋台を出して約200名の家族や地域住民をもてなす。

「数字も大切ですが、知人や家族に自慢できる、働きやすい工場であることを大切にしています。そうすれば、おのずと儲かったり、いいことがたくさんあるんじゃないか、というのが我々の考え方です」

このビジョンは工場長だけで決めたものではなく、課長たち全員が同意して作り上げた方針だという。だからこそ、リーダーが交代しても理念が揺らぐことはない。地球1周分のフレキホースも、猫のキャラクターも、尾道工場で働く人たちの誇りそのものなのだ。



▲人事総務課 チームリーダー 加藤諒さん(左)・工場長 横山晶さん(中央)・管理課 課長 山口智嗣さん(右)



▲タッチレス水栓・ナビッシュ。手をかざすだけで操作でき、給湯エネルギーの無駄遣いを防ぐエコセンサーも搭載している。

水栓金具ができるまで

